

◆令和4年度 第2回（通算第93回）蔵前ゼミ 印象記◆

日時：2022年6月3日（金）

ZOOMによる遠隔講義

建築, まち, 未来を描く

——もの・人・環境と向き合うオンリーワンのものづくり——

加藤 万貴（2002 建築, 2005 MS）清水建設株式会社 設計本部 商業・宿泊施設設計部 設計長

PC画面の壁紙（デスクトップの背景画像）にしたような写真やイラストが満載で、ガイド付きツアーに連れて行ってもらったような心地よいひと時だった。「建築」というと地震や風雪に耐える頑丈な箱モノを連想しがちだが、建築家は強度のみでなく、環境との調和に意を砕き、心地よく使いやすく見栄えのいい形に仕上げるべく、チームを組んで努力している。建築家に限ったことではないが、見る人や使う人に期待以上の感動や安らぎを与えたいのだ。聞き終わってみると、加藤さんの講演タイトルに建築家の責任・情熱・誇りがとてもうまく凝縮されていることに感心した。

職業意識が高まるにつれ、Work-life balance（WLB 天秤）の振れ幅の許容範囲が広がり、人間的魅力も増すようだ。加藤さんは、フィンランドに留学するなど、もともと職業意識は高かったが、それに拍車をかけてくれたのが、Facebook社のS. Sandbergさんの著書『Lean In（リーン・イン）：女性、仕事、リーダーへの意欲』だそう。もう1冊、加藤さんが働く上で助けてもらった本がある。第1子の産休・育休が明けて、しばらくしてから出版された『子育てしながら建築を仕事にする』だが、すぐには読む気にならなかったようだ。加藤さん自身は、復職したものの、仕事も家庭も中途半端で自信を無くしていた。そんな時だから、その本に飛びついたと思いきや、「身近な人が仕事も家庭も充実して働いている様子を垣間見る気にならず、読んだのは子供が3歳を超え、育児も仕事も軌道に乗ってきたとき」だったそう。ヒトの心の綾^{あや}をよく表している話だ。私には、このエピソードだけでも今日の講義は十分に価値があったと思える。しかし加藤さんにとっては大事なのはここからだ：「萬玉直子^{まんぎょく}さんのエッセイに“子育てと仕事、足して100%になればいいのだと思うよう

になった”と書かれているのを見つけて、肩の荷が下りた気分になりました」。第2子の産育休明けの超多忙な時期にも関わらず、本セミナーを引き受けて貰えたのも、“足して100%思考”のお陰かもしれない。加藤さんからのメッセージで、大切にしたいのは「家族の笑顔が生活の基盤」だということだ。

1. 学生時代までの生き立ち

父のDIYで建築に興味、M1時にフィンランドに留学

加藤さんは神奈川県藤沢市出身で、海から歩いて約10分のところで育った。父（加藤 廣, 1971 金属）がDIY（Do it yourself, 日曜大工）好きで、おもちゃや家具を手作りしてくれた影響もあって、高校生のころには建築を志すようになっていた。本学の6類に入学し、建築学科に進んだ。締め切りが迫った課題を仕上げるために、よく製図室で徹夜したそう。何とか朝方に課題を提出して、緑が丘駅から自由が丘に出て、東横線に乗り換えて家に帰ろうとするのだが、座席に座ったとたん爆睡してしまって、横浜⇄渋谷間を2往復したことも何度かあるようだ。

自分の思考を言葉及び形・空間で表現 | 卒業研究や修論では、意匠（デザイン）系の坂本一成（1966 建築, 1971 Dr, 2009 定年）研究室に所属し、住宅（卒論：段差のある主室をもつ住宅）や都市空間（修論：街区における空地の配列と連鎖）の研究をした。百年記念館を設計した篠原一男（1953 建築, 1986 定年）の流れをくむ研究室だ。論文は苦手、すごく苦労したが、「自分の思考を論理的に言葉で魅力的に表現すること」の大切さを学んだのはとても役立っている。さらに、研究室では先生が手掛けている実際の仕事の手伝いや「コンペ」への参加を通して「設計」の経験も積んだ。研究室の仲



図 1. 加藤万貴の略歴と主な実績。(1)研究室での模型作り, (2)フィンランドのヘルシンキ工科大学, (3)浅田鉄工東京支店, (4)清水建設本社, (5)T社東京本社, (6)幻の上野 E ビル, (7)札幌駅前通り共同ビル sitatte sapporo, (8)東急ステイ銀座, (9)箱根 ゆとわ, (10)ホテル“TIAD”[ティアド, 2023年7月に名古屋市の栄に開業予定]。加藤さんの関与: → 企画設計~工事監理(最初から最後まで), → 工事監理, → コンペ(コスト面で実現せず), → コンペ~基本設計。

間と一緒に、アイデアを形にするために建物のスタディ模型をひたすら作ったり(図 1-1)、休みの日には色々な建築を見に行ったりしてその建物について語り合ったりという純粋に建物や空間に向き合う日々で、いつも忙しかったそうだ。

留学の勧め(外から日本を見てみよう) | 大学では建築の勉強とともに留学もしてみたいと思っていたので、M1の時に1年間休学して留学することにした(派遣交換留学生, 2002)。留学先としては本学の協定校の中から、フィンランドのヘルシンキ工科大学(Helsinki University of Technology; 現地語 TKK, Teknillinen korkeakoulu)を選んだ。TKKは、2010年に統合・改称されアールト大学(Aalto University)になったが、新名称がフィンランドの著名な建築家・デザイナーである Alvar Aalto に由来するとのことだから、加藤さんには最適な留学先だったわけだ。

フィンランドは森と湖の国と言われるだけあって木材資源が豊富にあるので、「木」に関する授業がたくさんあった。例えば、(1)廃校になった小学校に学生たちが泊まり込み、1週間がかりで、近く

にある伝統木造建築の屋根の葺き替えを行ったり、(2)コンペで最優秀になった作品を、学内のウッド・ファクトリーを利用して、学生が実際に建てたり、(3)木造建築を設計したりする授業だ(図 2)。実際にモノに触れて考える大切さを学んだのも大きな収穫だったそうだ。



図 2. ヘルシンキ工科大学留学中に加藤さんが制作した課題作品。

フィンランドは、日本と違い、のんびりしていてマイペースの国のような。到着したのは日曜日で店が全部閉まっていた、コンビニ風の店で菓子を

買って何とかしのぎの得なかった；平日でも午後6時で閉店だそう。加藤さんは寮生活だったので、夜はいろいろな国からの寮生仲間との交流を楽しみ、フィンランド人の友達も呼んで、よくパーティをしたそう。

日本の学生は入学から卒業まで比較的横並びだが、フィンランドでは何年も大学にいる人もいれば、コンペに入賞し仕事のオファーがあったら大学に来なくなる人もいて、「働くこと」と「学ぶこと」の境界線があいまいなようだ。こんなわけだから、学位を取得しないまま建築家になっている著名人も少なからずいて、EU (European Union) 加盟時にはEU域内の建築家資格の相互承認のため、あわてて修士号を申請するという一幕もあったようだ。

2. 入社から現在まで(清水建設での仕事)

前置きと建築家の視点 | 視野を広げてくれた留学から帰った加藤さんは、2005年に修士課程を修了し、清水建設(株)^(注1)に就職した。当時はバブル崩壊後の、女性に限らず、採用がほとんどない状況から徐々に回復しつつあった時期で、幸運なことに、清水建設で約10年ぶりの女性総合職の採用となり、入社することができた。

加藤さん(1979年生、42歳)は、本ゼミ受講生の20年ぐらい先輩にあたり、清水建設に入社して、今年で18年目だが、途中2回、産休・育休を取ったので、実質16年目となる。去年の9月に第2子を出産して、先月(2022年4月)復職したばかりだ。今年の4月には長女(6歳)が小学校に、長男(7か月)が保育園に通い始め、慌ただしい毎日を過ごしている。そんな中、今日の講義の準備をしてくれたのだと思うと感謝の念で目頭が熱くなった。我が子を思うと同じくらいに、後輩のことを思う気持ちは見習いたいものだ。丁寧に、かつ美しく仕上げられたPowerPoint資料からは、加藤さんが会社でも頼りにされる存在であることがひしひしと伝わってきた。

ここでは建築関係のPowerPointについては、極一部しか紹介できないが、加藤さんが担当した主要なプロジェクト(図1)を辿り、現時点で次のような境地に達している^{いち}一建築家の成長と考え方を見てみよう：「建築の設計というのは、まだそこに

ない建物の姿を想像して図面にしていく仕事です。そして建物はそこにあることによってその町の一部になっていきます。日本ではわりと建物のサイクルは短いのですが、それでも一度立ち上がった建物は何十年もそこにあり続ける存在となります。ですから建物の姿を描くことは、同時に街の姿を描いていくことでもあるのです。そして、そこで過ごす人や街の未来についても同時に考えていかななくてはできない仕事でもあります」。

加藤さんが関わった建築の例

浅田鉄工東京支店(図1-3) | メーカーの営業所の建物で、加藤さんにとっては設計から工事完了まで、すなわち企画設計・基本設計・実施設計・工事監理からなる一連の過程の最初から最後までを担当した最初の例。床が2枚浮いているような軽やかなイメージが特徴。通常の建物と異なり壁や天井がなく、**階段の構造**にも工夫が凝らされている。

清水建設新本社(図1-4) | 新入社員のころから7年がかりで担当した大型プロジェクト。当時浜松町にあった本社を1903年から約90年間開業していたゆかりの地京橋に移転した。建設会社の本社にふさわしい建物として、SDGs (Sustainable development goals, 2015年の国連サミットで採択)を先取りする形で、**環境配慮型のカーボンゼロ**を目指した。太陽光発電や自然光による暖房・照明などを組み合わせて(図1-4b)、建物の消費エネルギーの70%削減を目指し、照明エネルギーに関しては100%削減を成し遂げている。

ただ積み上げていくだけで出来る**単純な作り方**を模索し、^{はしらはり}柱梁の構造体でもあるパネルに耐震パネルや太陽光パネル、LowEという高性能ガラスを組み合わせたユニットの積み重ね方式が開発された(図1-4b & 4c)。外装はアルミの鋳物を使って仕上げることににより美しく、かつメンテナンス不要になっている。外装に使ったアルミの鋳物をエントランス・ホールの構造体として使えないか検討したが、強度的に問題があり、スチールの方立を併用する構造に落ち着いた(図1-4a, 赤丸)。

できるか分からないものをひたすら考えてシュートを打ち続ける、つまり模型を作ったり、図面を描いたり、パーツを作ったりする作業を通して、自分の手を動かして**とことん考える**大切さを学んだそう。

T株式会社東京本社(図1-5) | 最終段階の建築確認申請を担当することになったが、初めてのことで、法

(2) フレックス勤務, (3) 在宅勤務, (4) ベビーシッター補助を活用している。大まかには表 1 のような生活のようだ。加藤さんが現在在籍する設計チームの半数ぐらいが保育園児をかかえているので、お互いにフレックスで勤務時間を調整し、子供が熱を出して休む時も「お互い様」という感じで、さほど気兼ねすることなく働いている。緊急時には、母の手も借りることができた。

表 1. 保育園への送迎と出退勤時刻 (第一子産育休後)

仕事	月	火	水	木	金
送り(朝)	夫	本人	本人	本人	夫
迎え(夕)	本人	夫	夫	FS ¹⁾	本人
出勤(本人)	始発電車~ 9:00	9:30	9:30	9:30	在宅勤務
退勤(本人)	16:30	17:30	17:30*	19:00*	在宅勤務

¹⁾ FS (family support): 地域において、育児や介護の援助を受けたい人で行いたい人が会員となり、育児や介護について助け合う会員組織。子供の送迎などを頼める。

*状況に応じて残業を調整

中途半端？ | そうは言っても、産休明け後の1年間は大変で、第1子の時は38日も休まざるを得ず、「復職したものの、仕事も家庭も中途半端で、いつも“あれも出来ない”、“これも出来ない”と感じていて余裕や自信がなかった」そう。そんな時に、魅力的なタイトルの本『子育てしながら建築を仕事にする』(図4)が刊行された。タイミング的には加藤さんのために出版されたような本だったが、手に取る気にならなかった。「身近な人が仕事も家庭も充実して働いている様子を垣間見る気にならなかった」からだ。落ち込んだ時の私たちの心情をよく表している。この心の特性を本能として素直に受け入れ、いかに制御するかが人生の要になると「道徳」や「倫理」の時間に教わったが、一般的にはそのような心の動きはネガティブにみられることが多いので、隠そうとする。すぐ読まなかったことには触れないで、話を進めても何の問題もないので多く人はそうするだろう(私もその1人だ)。しかし、加藤さんが意図したか否かは別として、今回のプレゼンの方がこれから親になる人たちに訴える力は、はるかに大きいことを学んだ。

子育てと仕事は足して100% | 結局、その本が出版されてしばらくして、子供が3歳を超え、子育ても落ち着いて仕事も軌道に乗ってきた頃よう



図 4. 成瀬友梨 (著, 編集), 三井祐介, 萬玉直子, 杉野勇太, アリソン理恵, 豊田啓介, 馬場祥子, 勝岡裕貴, 鈴木悠子, 木下洋介, 永山祐子, 瀬山真樹夫, 朽尾直也, 矢野香里, 松島潤平, 吉川史子, 『子育てしながら建築を仕事にする』, 学芸出版社, 2018。

やく手にとって読むことができた。そして、萬玉直子さんのエッセイの中に「子育てと仕事、足して100%になればいいのだと思うようになった」という一文を見つけて肩の荷が下りた気分になったそうだ。『子育てと仕事、足して100』は語呂もいいので、目に見えない呪縛から逃れるおまじないにしよう。

七転八起を経て辿り着いたルール: 家族の笑顔が生活の基盤

仕事は、真剣に取り組めば取り組むほど、こうすればもっと良くなるということが分かり、どんどのめり込んでしまうという魔力を持っている。それゆえ、子供の体調が悪い時にも無理して働いてしまう。その結果自分も参ってしまい家庭が回らなくなる。子育てしながらの共働きには大きな負荷がかかっているの、些細な事でも問題は大きくなりやすい。加藤さんも似たような失敗を繰り返した。その苦い経験を通して出来たのが「家族の笑顔が生活の基盤」だというルールだった。それ以降は、家族に笑顔がなくなるぐらい元気がなくなったら、仕事がどんな状況でも思い切って休むことにしている。その代わりに、それ以外の時は朝早くでかけて働くし(表1の始発電車)、家族が元気な時は無理して働くこともあるそう(前述の箱根出張など)。そうやって働いてきた結果、最近の例では、物凄くピンチの大型リフォーム案件を納期に間に合わせて仕上げることができ、施主側の責任者から感謝のメールが届いた; 責任をもって対応し顧客との信頼関係を築くことの大切さを再認識させてくれる内容で、胸にジーンときたようだ。

「ちょうどよく働くって とても難しくて、人によっても環境によっても どれくらい働くのがちょうどいいかは違うし、でも試行錯誤しながらでも働き続けることができたら、仕事をする事で人の役に立つことができます。人の役に立つことは、実は自分の幸せに繋がるんじゃないかと最近思うようになりました」とのことだった。

自己肯定, そして仕事と人生を楽しむ

加藤さんが働く上で助けてもらったという本がある。それは Facebook の COO のシェリル・サンドバーグ (Sheryl Sandberg) 著の『LEAN IN---女性, 仕事, リーダーへの意欲』^(注2) という本だ (図 5)。これは TED で話題提供された内容「なぜ女性のリーダーは少ないのか」(Why we have too few women leaders) を本にまとめたもので、働き続けたい女性に対する示唆に富む内容となっている。女性の考え方の癖を客観的事実に基づいて説明した上で、その問題点を気づかせてくれる。例えば、「将来結婚して子供を産んで育てたいなら、私 今このやりたい仕事をやれませんか」と相談しに来た女性がいて、よくよく話を聞いてみるとこの人は結婚してなくて、それどころかボーイフレ



図 5. 加藤さん推奨の 1 冊。フェイスブックの COO

(Chief Operating Officer, 最高執行責任者)が本書で勧める「一歩」を踏み出せば、仕事と人生はこんなに楽しくなると宣伝されている。“Lean in”: to actively accept challenges and seek more responsibility, especially in order to progress in your career. Traditionally “lean in” has been used in the context of sports to mean “to shift one’s body weight forward.

ンドもいなかったという話も紹介されている。これは、女性が子供のことを考えたその瞬間から仕事をセーブしてしまうために、仕事の上でのあらゆるチャンスを逃してしまうという「内なる障壁」の 1 例だ。加藤さんは、この事実を知ったことで意識的にそのような思考をしないようになり、そうすると不思議と色々なチャンスが巡ってくるようになったそうだ。

内なる障壁の打破 | Sandberg さんのメッセージを引用しておこう:「社会に築かれた自分の外の障壁に加えて、女性は自分の中の障壁にも行く手を阻まれている。私たち女性は大望を掲げようとする。それは自信がないからでもあるし、自ら名乗りを上げようとせず、一歩踏み出すべきときに引いてしまうからでもある。私たちは自分の内にネガティブな声を秘めていて、その声は人生を通じて囁きつづける——言いたいことをずばずば言うのははしたない、女だてらにむやみに積極的なのは見苦しい、男より威勢がいいのはだけない…。私たちは、自分に対する期待を低めに設定する。相変わらず家事や育児の大半を引き受けている。夫やまだ生まれてもいない子供のために時間を確保しようとして、仕事上の目標を妥協する。男性の同僚に比べると、上の地位をめざす女性は少ない。他の女性のことをあげつらっているわけではない、私自身が同じ過ちを犯してきた。いやいや、ときにいまも犯している。◆女性が力を手にするためには、この内なる障壁を打破することが欠かせない——これが、私の主張である。…◆内なる障壁は軽視されがちで、話題に上ることもめったにない。私自身、職場での不平等については何度となく耳にしてきたし、仕事と家庭の両立がいかに困難かは繰り返し聞かされたけれども、自分から身を引いてしまう傾向についてはほとんど聞いた記憶がない。こうした内なる障壁にもっと注意を払うべきだと思う。理由の一つは、この障壁は自分でどうにかできるからだ。私たちは、自分の手で今日にでもこの壁を打ち壊すことができる。いまこの瞬間にだって始められるのである。…◆…私が本書を書くのは、(私が社会に出て)グーグルやフェイスブックで働く前に知っていたら、私自身の役に立ったはずのアドバイスをしたいか

らでもある。それは様々な状況に置かれた女性たちの心にきつと響くと信じている」。

4. これまでの社会人生活を振り返って

最後に、「実は私…」という加藤さんの“告白”も記しておこう。入社した時は、配属先として『教育施設』を作る部署を希望していたそう。それが叶わなくても、せめて『オフィス』以外にという願いもむなしく、オフィス部署に配属されてしまった。しかし、実際にそこで働いてみると、2節で述べたように自分の成長につながる貴重な経験を積むことができ、そこで得た知識は今の加藤さんの武器になっている。今はオフィスから『ホテル』を設計する部署にかわっているが、住宅のように豊かな空間を合理的な美しい骨格の建物(ホテル)の中を作るべく、これまでの経験を活かして働くことができている。

「もし皆さんが自分の思っているのと違った仕事に取り組むことになったとしても、まずはそれに全力で取り組み、ドップリとその世界に浸かってみて欲しい。その経験の一つ一つが武器になるし、関係のないように思える独立の点状の経験でも、10年後20年後に、それらの点と点が繋がり線になって、自分が考えてもいなかったような新しい世界が開けるのではないか」と思うそうだ。

<パネルディスカッション>

以下の設問に答える形で5名の学生(パネラー)が意見交換した。アルバイトの経験、趣味の延長、研究者志望、異分野の勉強に惹かれるなどの理由で、食品や健康関係の企業で働きたい人が多かった。これは受講生の多くがバイオ系の学生であることを反映しているだろう。人社系の学生では金融も話題になった。高めあえるような仲間がいて“at home”な組織で働き、人々の生活をより良くしたり、人々に夢や幸せを与えたいというのは共通な望みで、必然的に「チャレンジ心のある人」、「場を盛り上げる人」、「high spec なる人」、

「まとめが上手な人」が尊敬の対象になるようだ。

- (1) どのような仕事をしたいですか? それを選ぶきっかけとなった好きなもの(技術・製品、作品など)を理由とともに教えてください。
- (2) どのような組織で働きたいですか? それを選ぶきっかけとなったあなたが尊敬する人物をエピソードとともに教えてください。

(注1) 清水建設は1804年の創業で218年もの歴史を有する。創業者は清水喜助(1783~1859, 越中富山出身)という大工の棟梁で、1884年に木材切組場(木材の加工工場・現東京木工場)を開設した。この工場は現在でも木材の加工を行うなど技術の継承を行っている。ほぼ同じ頃1887年に製図場(日本で初めての設計組織)を設立、現在では1000名以上の設計者が日々設計活動に携わっている。◆1944年に技術課(現技術研究所)が設立され、現在でもR&Dの拠点として建築土木の他、多岐にわたる分野の研究開発の拠点として清水建設の技術力を支えている。まだ作ったことのない出来るか分からないものづくりに挑戦しているのも、この技術研究所に負うところが大きい。◆現在は様々な建物の設計・建設・保全を行っている。最近の例としては、有明体操競技場(第62回BCS賞受賞)などのオリンピック施設も手掛けた。建築の他、土木や不動産、エンジニアリング、フロンティア事業なども行っている。

(注2) Sheryl Sandberg(著), 村井章子(訳), 川本裕子(序文), 『Lean in(リーン・イン): 女性, 仕事, リーダーへの意欲』, 日本経済新聞出版社, 2013。2018年に文庫化。女性たちのポテンシャルを引き出し、自分の幸せとキャリア上の成功を手に入れるための方法を伝授(会社での交渉術, メンターの見つけ方, よいキャリア設計, “すべてを手に入れようとしなさい”など)。次の問いに答えようとしている: 新規大卒者の50%が女性となってから30年が経過したにもかかわらず、いまだにアメリカの政府や企業のリーダーの大多数は男性です。つまり、社会生活に大きな影響を与える決定において、女性の声が平等に反映されにくい状況が続いているのです。この問題は、日本ではより顕著です。なぜ女性リーダーが生まれにくいのでしょうか? その原因はどこにあるのでしょうか?

(東京工業大学 博物館 資史料館部門 特命教授 広瀬茂久)